

アルコール症退院患者の追跡調査

—— 主として環境要因を中心に ——

富山市民病院 草野 亮 平原 公平
 神経科精神科
 富山保健所 中川 秀幸

はじめに

わが国の経済の発展とともに、酒類の多様化と年間消費量の年々増加傾向がいちじるしく、それに伴ってアルコール症患者も増加の一途をたどり、社会的な問題となっている。アルコール症の治療はきわめて困難であり、入院治療によりせつかく軽快しても、退院後に再飲酒して再発をくり返すものが多い。

そこで、私どもは退院患者の追跡調査を行い、どのような環境因子が再発と関連があるかについて考察を試みた。すなわち、断酒群(A)と再飲酒群(B)の2群に分け、それぞれについて比較検討するというかたちをとった。

調査対象および方法

昭和45年1月1日から57年12月31日までの13年間に、T病院精神科を軽快退院した患者141名を調査対象とした。その中、死亡した26名を除いた残り115名についてアンケート調査を行った。回答率は78.3%であった。

調査結果

断酒群は40名44.4%であり、再飲酒群は50名55.6%であった。

(1) 結婚状況について(図1)

断酒群では、既婚者(同居)が全体の81.1%という高い数値を示しているが、再飲酒群でのそれは66.6%と低い。一方、既婚(別居中)は、断酒群2.7%にたいし、再飲酒群は6.7%と高い。また、未婚者については、断酒群

図1 結婚

	断酒群(A)	再飲酒群(B)
既 婚(同居)	30 (81.1%)	30 (66.6%)
既 婚(別居)	1 (2.7%)	3 (6.7%)
未 婚	3 (8.1%)	9 (20.0%)
離 婚	3 (8.1%)	3 (6.7%)
計	37 (100.0%)	45 (100.0%)

の8.1%に比し、再飲酒群が20.0%と2倍以上に高かった。離婚者については、断酒群が8.1%、再飲酒群が6.7%と両者にあまり大きな差はみられなかった。

(2) 家族構成について(図2)

図2 家族構成

	断酒群(A)	再飲酒群(B)
配 偶 者	30 (44.8%)	32 (39.5%)
子 供	25 (37.3%)	27 (33.3%)
兄 弟・姉 妹	1 (1.5%)	3 (3.7%)
親	8 (11.9%)	16 (19.8%)
1 人 暮 し	3 (4.5%)	3 (3.7%)
計	67 (100.0%)	81 (100.0%)

配偶者が存在するものが、断酒群44.8%にたいし、再飲酒群では39.5%と、断酒群の方が多かった。また、子供の存在については、断酒群が37.3%、再飲酒群が33.3%と、断酒群の方がやや高かった。親との同居は、断酒群11.9%にたいし、再飲酒群では19.8%と、逆に再飲酒群の方が多かった。

(3) 周囲の雰囲気について(図3)

退院後に、「周囲の雰囲気が変わった」と答えたものが、断酒群で74.3%と高値を示したのにたいし、再飲酒群は29.2%と低い値であ

図3 周囲の雰囲気

	断酒群(A)	再飲酒群(B)
はい	29 (74.3%)	14 (29.2%)
いいえ	10 (25.7%)	34 (70.8%)
計	39 (100.0%)	48 (100.0%)
家族	21 (50.0%)	10 (52.6%)
職場	6 (14.3%)	2 (10.5%)
近所	7 (16.7%)	3 (15.8%)
親戚	3 (7.1%)	3 (15.8%)
その他	5 (11.9%)	1 (5.3%)
計	42 (100.0%)	19 (100.0%)

た。周囲のどこに変わったかを問うと、もっとも身近かに生活する家族と答えたものももっとも多く、断酒群で50.0%、再飲酒群では52.9%であった。近所や職場の変化も10~16%にみられた。

(4) 家族関係について (図4)

図4 家族関係

	断酒群(A)	再飲酒群(B)
よい	37 (100.0%)	38 (79.2%)
あまりよくない	0 (0.0%)	7 (14.6%)
いざこざがある	0 (0.0%)	3 (6.2%)
計	37 (100.0%)	48 (100.0%)

断酒群の全員(100%)が、現在の家族関係が「よい」と答えているのにたいし、再飲酒群のそれは79.2%に過ぎなかった。また、再飲酒群の方には「あまりよくない」が14.6%、「いざこざがある」が6.2%もあった。

(5) 経済状態について (図5)

図5 経済状態

	断酒群(A)	再飲酒群(B)
自立	31 (83.8%)	26 (54.2%)
肉親	2 (5.4%)	9 (18.7%)
生保・年金	3 (8.1%)	12 (25.0%)
その他	1 (2.7%)	1 (2.1%)
計	37 (100.0%)	48 (100.0%)

経済的に自立しているものは、断酒群では83.8%の高率にたいし、再飲酒群では54.2%とかなり低かった。肉親の援助で生活しているものは、断酒群が5.4%にたいし、再飲酒群

では18.7%と高い値であった。また生活保護や年金での生活者は、断酒群が8.1%と低いのにたいし、再飲酒群では約3倍の25.0%をしめた。

(6) 住居について (図6)

図6 住居

	断酒群(A)	再飲酒群(B)
持家	29 (76.3%)	37 (82.2%)
借家	8 (21.1%)	7 (15.6%)
下宿・住み込み	1 (2.6%)	1 (2.2%)
計	38 (100.0%)	45 (100.0%)

持家率をみると、断酒群は全体の76.3%にたいし、再飲酒群は82.2%と、再飲酒群の方にむしろ高い値がみられた。反対に、借家住いは、断酒群が21.1%であるのにたいし、再飲酒群では15.6%と、断酒群の方が高かった。下宿・住み込みは、断酒群2.6%、再飲酒群2.2%と大差はみられなかった。

(7) 職業について (図7)

図7 職業

	断酒群(A)	再飲酒群(B)
ある	35 (87.5%)	38 (58.3%)
ない	5 (12.5%)	20 (41.7%)
計	40 (100.0%)	58 (100.0%)
変らない	30 (81.1%)	26 (67.6%)
変った	7 (18.9%)	12 (32.4%)
計	37 (100.0%)	38 (100.0%)

現在、職業のある者は、断酒群が全体の87.5%と高いのにたいし、再飲酒群では58.3%と低い。退院後の転職の有無については、断酒群の81.1%がひき続き同じ職業を継続しているのにたいし、再飲酒群のそれは67.6%と低かった。再飲酒者の転職は32.4%の高さにみられた。

(8) 趣味について (図8)

なんらかの趣味をもっているものが、断酒群では74.4%であったのにたいし、再飲酒群では48.9%に過ぎなかった。再飲酒群では、無趣味のものが51.1%にもなった。

(9) 入院に関すること (図9, 図10)

図8 趣味

	断酒群(A)	再飲酒群(B)
あ る	29 (74.4%)	23 (48.9%)
な い	10 (25.6%)	24 (51.1%)
計	39 (100.0%)	47 (100.0%)

図9 入院の仕方

	断酒群(A)	再飲酒群(B)
自 分 で	11 (23.9%)	8 (15.1%)
家族にすす められて	19 (41.3%)	20 (37.7%)
医師にすす められて	6 (13.0%)	8 (15.1%)
強 制 的 に	6 (13.0%)	12 (22.6%)
幻覚などで 仕方なく	3 (6.6%)	4 (7.6%)
そ の 他	1 (2.2%)	1 (1.9%)
計	46 (100.0%)	53 (100.0%)

図10 入院の感想

	断酒群(A)	再飲酒群(B)
よ っ た	32 (82.1%)	21 (46.7%)
恥 かし い	3 (7.7%)	12 (26.7%)
無 駄 だ っ た	4 (10.2%)	5 (11.1%)
そ の 他	0 (0.0%)	7 (15.5%)
計	39 (100.0%)	45 (100.0%)

過去の入院の際に、「家族にすすめられて」入院したものが断酒群では41.3%、再飲酒群では37.3%と両群とも第1位の高さをしめしたが、「自分で」入院したものが、断酒群では23.9%で、再飲酒群の15.1%よりも高かった。

他方、「強制的に」入院させられたものが、断酒群の13.0%にたいし、再飲酒群では22.6%とかなり高い値をしめしている。「幻覚などで仕方なく」入院したものは、断酒群、再飲酒群とも大差なく、それぞれ6.6%、7.6%であった。

現在、「入院をしてよかった」と考えているものは、断酒群では82.1%と高値なのにたいし、再飲酒群では46.7%と低い値であった。また、「恥かしい」と思っているものは、断酒群の7.7%なのにたいし、再飲酒群の方では26.7%と異常に多かった。なお、「入院は無駄だった」と思っているものが、両群ともほぼ

10%にみられた。

(10) 退院後の入院経験について (図11)

図11 退院後の入院経験

	断酒群(A)	再飲酒群(B)
は い	13 (32.5%)	30 (62.5%)
い い え	27 (67.5%)	18 (37.5%)
計	40 (100.0%)	48 (100.0%)
精 神 科	6 (42.9%)	15 (46.9%)
内 科	5 (35.7%)	9 (28.1%)
そ の 他	3 (21.4%)	8 (25.0%)
計	14 (100.0%)	32 (100.0%)

退院後に、入院経験があると答えたものが、断酒群の32.5%にたいし、再飲酒群では62.5%と再飲酒群に高値をしめした。再入院の診療科をみると、精神科には断酒群42.9%、再飲酒群46.9%とそれぞれ約半数を占め、ついで内科が30%前後で、あとは整形外科・外科などであった。

(11) 健康状態について (図12)

図12 健康状態

	断酒群(A)	再飲酒群(B)
よ い	37 (90.3%)	29 (59.2%)
あまりよくない	3 (7.3%)	10 (20.4%)
病気がある	1 (2.4%)	10 (20.4%)
計	41 (100.0%)	49 (100.0%)

「よい」と答えているものが、断酒群の方は、大部分の90.3%であるのにたいし、再飲酒群の方は59.2%と低かった。「あまりよくない」と答えたものは、断酒群が7.3%であったが、再飲酒群の方では20.4%とかなり高値をしめした。「病気がある」と答えたものは、断酒群の2.4%にたいし、再飲酒群の方では約10倍の20.4%をしめしていた。

考 察

結婚状況については、既婚者でかつ同居しているものが断酒群に多く、別居しているものが再飲酒群の方に多くみられたが、このように配偶者の同居が断酒のうえで良好な影響を与えているものと考えられる。断酒にあた

って、配偶者のもつ役割が重要であることは、これまでも他の方面からいろいろと報告されているが、私どものこの結果はそれに一致する。また、別居と未婚は再飲酒群に多く、ここでもそれらの状況が断酒のうえでマイナス要因であることを如実にしめしている。離婚は、両群の間で差がなかったことは意外であったが、断酒群についてはこの離婚が断酒の決意をかためるきっかけになったというプラス要因も含まれていると考えることができよう。

家族構成については、断酒群では配偶者や子供の存在がやや多く、再飲酒群では親の存在が多かった。断酒のうえで、配偶者の支えや子供の期待がプラス要因となるが、親の存在は断酒の妨げに何らかの関与をしている可能性も示唆される。すなわち、親の庇護や本人の甘えが、断酒の決意をにぶらすマイナス要因として働いているようだ。

家族関係は、断酒群の全員が「よい」と答え、断酒によって円満で幸福な家庭生活をとり戻したことをしめしているが、再飲酒群にはかなり問題があることが示唆される。本人の再飲酒により家庭内に問題が起こり、それがさらに本人を重篤な飲酒へと促す悪循環が発生するものと考えられる。

経済状態については、断酒群には自立しているものが多く、再飲酒群には家族や社会への依存度が高かった。再飲酒により、家庭経済をこれまでより悪化させ、それがストレスとなってさらに逃避的な多量飲酒となって家庭経済の破壊へと導く。

住居については、再飲酒群に持家率が高かったのは意外であったが、「狭いながらもわが家」という安心感が、かえって心のゆるみとなり再飲酒へとつながっているようにみえる。断酒群に借家住居の率がやや高かったが、仮住居という不安定要素がむしろ心のハリとなって断酒の原動力の一つとなる可能性もあるようである。

職業については、断酒群の有職者が多く、再飲酒群にそれが少ないのは当然であろうが、再飲酒群の有職者についても転職が多いのが特徴である。再飲酒が家庭内の状況をわるくするばかりでなく、職場の適応状況にも問題があることをしめしている。

趣味を有するものは断酒群に多く、断酒するのになんらかの助けになっているものと考えられる。

入院に関しては、両群とも家族にすすめられて入院したものがもっとも多いが、断酒群と再飲酒群の違いは、断酒群では自分からすすんで入院したものが多く、再飲酒群には強制的に入院させられたかと思っているものが多い。また、入院をしたことについては、断酒群のほとんど大部分が「よかった」と考えているのにたいして、再飲酒群のそれは半分にも満たず、「恥ずかしい」、「無駄だった」というように否定的な感情をもっているものが多かった。これらの結果は、入院の際の動機づけや入院期間中の治療のあり方について非常に示唆を与えるものと思われる。

退院後の入院経験については、再飲酒群の約6割が再入院をしていたが、断酒群についてもその半分の約3割が再入院を経験している。それは、断酒群でも必ずしも一回で断酒できるものではなく、再入院という苦渋をなめたうえ、ようやく断酒できたものも含まれているということをしめしている。

健康状態については、断酒群ではほとんど大部分が「よい」のにたいし、再飲酒群の方は、「よい」が半分強に過ぎず、著しい明暗を分けた。再飲酒により心身の傷害がさらにすすんでいることがしめされていた。

参考文献

1. 佐藤忠宏, 唐住輝, 荻野新六, 鷺山純一: アルコール中毒患者の子後調査, 精神医学, 15: 1167~1276, 1973.
2. 洲崎 寛: アルコール中毒患者の子後に関する研究,

精神経誌, 77: 89~106, 1975。

3. 山根 豊: アルコール中毒の長期予後に関する研究, 慈医誌, 93: 458~474, 1978。

4. 松本博隆, 石沢宗和, 古賀義, 宮崎淳二: 集団療法における慢性アルコール中毒の予後と諸因子(社会, 身体, 心理)との関連, アルコール研究, 14:

249~250, 1979。

5. 田中孝雄: 慢性アルコール中毒の長期予後の研究, 慶応医学, 57: 733~748, 1980。

6. 鈴木康夫: アルコール症者の予後に関する多面的研究, 精神経誌, 84: 243~261, 1982。